

時雨るるや君が門なる辛夷こふしの木うす紅葉して
散り急ぐなる

増毛にて。

音たてて霰降りすぎし軒さきにいま落葉か松まつの
落葉散りつつ

石狩國深川町鬼川俊藏君方にて。

ゐろりばたに大き鉢ありて茹栗ゆせりのゆであがり
たる満たしたるかも

朝寒に鍛冶屋が鎚の牙えひびく深川町にめざ
めたるかも

秋味とて鮭のとるるさかりなり、北見國網走港
にて。

あきあぢの網こそ見ゆれ網走あはしりの眞黒き海の沖
つ邊の波に
ひとつらに並び流るるよ網走のその川口の眞
白きごめは(ごめは鷗)

十勝國池田町中島竹雄君方にて。

池に落つる水は冬なりガラス戸にゐてあそべるは赤きあきつなり

同國帶廣町なる社友歌會席上にて。

おこし急ぐ炭火ほのかに熾りつつ今は本降となりし雨かも
うつつなに聞きるし雨のしみじみと廂にひびくこの寢覺かも

十勝より狩勝峠を越え石狩平原に出づ。

野の末にほのかに靄ぞたなびける石狩川の流れたるらむ

石狩國砂川炭山にて、雪中所見。

秋すでに蕾をもてる辛夷の木雪とくるころ咲くさまはいかに
霜はいま雫となりてしたたりつ朝日さす紅葉うつくしきかな

夕張炭山の甲斐猛一君方にて。

とろとろとひとり燃えつつるりなる櫓のほ
のほのあはれなるかも

同君に案内せられて炭山坑内に入る。

白雪の積めるがままに坑木はいま坑内ふかく
おろされてゆく

陸奥國新城村淡谷悠藏君の開墾地にて。

起き伏せる岡の片かげに泉湧き泉のそばに君
が家はありき

朝

朝闇に雨戸ひきあけ灯をともし圍爐裡に向ふ
これのたのしさ(そのこ
部屋にまだ灯のあるものをみそさざい障子の
そとの竹に來啼ける
軒寄りに茜いろ濃く下はうすし障子に朝日
まさすところ
うら寒き茜かき流しわが障子煤びし染めて朝
日さしきぬ

夙とく起きて心たのしもわが部屋の障子に竹の
 影さやぎたち
 野末なる山の端はゆさしわが部屋にあまねき冬
 の朝日なりけり
 曉の光うすあをみ障子にあり今朝は曇りて寒
 けくあるらしその三
 曇りぞとおもひしものを朝づく日障子染め來
 つ寒き日和ぞ
 この朝や雪もよひして雲焼けぬ今し障子の赤
 く染まれる

雪もよひけふの朝日の弱ければ障子に竹の影
 の淡あはかる
 雨戸まだしめきりてものを書き急ぐ戸面とに高
 き鳥の聲起る（その三）
 夜の明を先づ啼く鳥の百舌鳥もはいま高音たか張り
 つつなきいでてきぬ
 ほしいままに啼きすてつと飛び去りぬとお
 もふに百舌鳥は啼くよ彼方に

庭の冬

富士が嶺の麓ゆ牛に引かせ来て山櫻植ゑぬゆ
 ゆしく太きを
 冬ふけていよよ葉の色ふかみたる山梔子の木
 の葉がくれの實よ
 こぞ植ゑしばかりの柚子のこれの老樹思はざ
 りけり實をあまたつけつ
 霜來むに早や摘みとりてかこへよとひとの言
 へれどつみかねつ柚子を
 冬青木の木に實のなることを知らざりきさん
 ごのたまの赤き粒の實

庭石のかげに咲きたる沈丁花いま咲ける花は
 この沈丁花
 葉がくれに蜂の巢ありし梅もどき落葉しはて
 つ蜂の巢も落ちぬ
 このあたりちひさき池をほしとおもふ老樹の
 柘榴枝たれしもとに
 池を掘らば先づ鮒の子を放ちやらむ鮠も放た
 む池のほしさよ
 この秋に笑みて三つ四つ實を落とし若木の栗は
 落葉してをる

ガラス戸をぬぐひ浄めてすがしきに透りて見
ゆる庭木々の冬

雑

詠

ひとところあけおける障子の間より見ゆるは
ただに枯芒の原
上枝よりこぼれ落ちたるみそさざい胡頹子の
下枝に落ちとまり啼けり
縁先のちさき茂みの布袋竹に朝ごと來啼くみ
そさざいの鳥

つぎつぎに所を變へてなく鳥のみそさざいは
なく常に低き枝に
置く霜の今朝のさやけさ押しなびき枯れ伏せ
る草のうへに置く霜
鐵瓶を二つ爐に置き心やすしひとつお茶の湯
ひとつ爛の湯
夜爲事のあとを勞れて飲む酒のつくづくうま
し眠りつつ飲む
ゐろりなるすすけ鐵瓶に影さしぬ障子の穴ゆ
漏れし朝日は

椎の實

ふるさとの母にねだらむとおもひるし椎の實
 をけふ友より貰ひぬ(そのこ
 てのひらにこぼるるばかり持ちたれば椎の實
 の粒はひえびえとして
 椎の實の黒くちひさき粒々をてのひらにして
 心をさなし
 椎の實の寂びぬる粒を手には持ち袋にはうつ
 し心をさなし

われはもよわらはべなりき故郷の山に椎の實
 を拾ひてありき
 暁の四時といへるに獨り起きゐて椎の實を炒
 るよ夜爲事のあひに(その二)
 かきますれば音のさやけさ焙烙ほうろくの圓きがなか
 のこれの椎の實
 椎の實のはやいれたらしかうばしき匂はおこ
 るかきまするままに
 ちひさなる圍爐裡のなかの焙烙に椎の實はい
 ま匂ひたちたり

いる椎のはせて飛びぬればいにしへのわらは
 べの日の驚きをしつ
 栗の實の甘さはなけれ椎の實のこのあまから
 ぬありがたきかな
 鬚ひげの中に白きがまじる歳になりていよよ親し
 き椎の實の味

みそさざい

わが額かぶにあぶらを覺ゆ寒き夜をもの書き急ぎ
 書き終へし時

鐵瓶をおろせば湯氣のひたとやみて寒けき眞
 夜の部屋にありけり
 夜爲事のあとを勞つかれてすわりをり膝にしみた
 る曉の冷
 今朝早く電燈消えつ机のうへうす暗ければ爐
 には向ひぬ
 耳鳴のほのけく起る覺えつつるろりにかざす
 双もて手なりけり
 みそさざいと啼き出でぬわが部屋の障子の
 そとはまだ明けやらず

日いまだし明の蒼みをやどしたる障子のそと
のみそさざいの聲

竹の影

遠山の箱根の峰に出づる日のひかりまともに
わが部屋にさすそのこ
朝づく日野すゑの山に昇りけむ障子に竹の影
さやぎたちぬ
朝づく日障子に淡く流れたりあはつけきかも
竹の葉の影

朝づく日ふみ湛へて障子明るしさやぎて竹
の葉の影ぞある
朝づく日昇りさだまり澄みぬれば障子に竹の
影深くなりぬ
縁先に見るものに竹をわが植ゑき障子に影さ
す知らざりにけりそのこ
布袋竹枝葉こまやかにたけ伸びす枝垂れなび
かびさゆらぎてをる
根がたにはつねに鶏来てあそぶこのひとむら
の布袋竹の蔭に

雨降れば上枝（上）しだれて濡縁にその葉とどかす
布袋竹（布）の竹

爐

邊

藁灰のみにくかれどもやはらかに火をたもて
れば爐には満たせる
獨り向ふこの爐にあればおのづからつつしみ
向ふちさきこの爐に
膝寄せてもろ手がざせば爐のなかの燠（おき）は静か
に燃え入りてをる

ほの白き灰をうすうす被（か）きそめぬおこりきり
たるこの燠（おき）はいま

藁

灰

藁の灰減りやすくして圍爐裡寒し新たに焚き
て添ふべくなりぬ
とりおけるこの炭俵よこれを焚きて新藁灰（新）は
作らむとおもふ
野の萱を編みて作れる炭俵冬野のほひふく
みたるかも

かき曇り雪もよひして風のなしけふ藁灰を焚
 かむとおもふ
 山萱を荒編なせる俵焚きて作れる灰の荒く眞
 黒し

奉悼の歌

十二月二十五日早曉終に崩御の報を聞く、かな
 しみうたへる歌。

神去りたまひぬといふよべの夜半につひにと
 こしへに神去りたまひぬ

おん病あつく永びきおはしましき今は終りと
 ならせたまひぬ
 御身弱くましませしかば國民の我等がうれひ
 常にとけずありき
 とけざりし我等が憂ひあはれつひにけふのな
 げきとなりにけるかも
 うつし世にをろがみまつる稀なりしわが大君
 は神去りましぬ
 下々の我等がなげきあはれかしこしけふ雲の
 うへにありとおもふに

うちつけになげき悲しむ下々のわれらがごとく
 くにあらせたまはぬ

多摩御陵をおもふ

武藏野の大野の奥の静もりにしづまりたまふ
 大御靈かしこ

おほらかに高まりゆける野の奥の野づかさな
 ればさやけからまし
 山川の風ぎしづもれる武藏野の野づかさ占め
 て休らはせます

うつし世は御事おほかりき山川のいま静けき
 に休らはせます
 御陵の邊に生ふる木草ともしかも羨しかも木
 草羨しかも木草
 御民われ草鞋うちはき笠かうぶりまうでまゐ
 らむ野の御陵に

昭和二年元旦（以下昭和二年）

元日の明けやらぬ部屋に燈火ともしつけただに坐り
ゐて心つつまし

元日の明けやらぬ書齋小暗きに獨り坐りをれ
ば妻の入り來きぬ

年ひさしくむつみ來りぬ元日の今朝壽詞よごと申す
わが古妻に

元日の明あけの静けさ聞ゆるは家の裏なる濱の白
浪

ふと見れば時計とまりをり元日のあかつきに
して見れば可笑しき

部屋出でてたち迎ふれば眞ひがしの箱根の山
ゆ昇る初日子

濡縁の狭きに立ちてをろがむよわが四十三の
けふの初日を

元日は陰曆霜月廿八日にあたれり。

初日の出待ちつつあふぐ山の端はにこはかすか
なる有明の月

けふあたり終りとおもふ有明の月はかすかに
残りたるかも

千本松原といへれど雑木茂りあひてきながら
の密林なり。

わが家は松原の蔭松に棲む鴉なき出でてけふ
は元日

森なかをわが過ぎゆけばまなかひに小鳥まひ
かはしけふは元日
かすかにもさゆらげる葉に日ざし透れり冬の
瑞葉の美しきかな

海岸の森にしあれば高く聳えずこもり茂らひ
瑞葉垂らせり
冬ながらみづ葉かがやく此處の森のみづ葉め
でをりけふは元日
茂りあひてかたみに木々が落したる木洩日匂
ひけふは元日
森かげの路をゆきつつわが歳の四十三をおも
ふけふは元日
木洩日の日ざし袖にあり森なかの路をゆきつ
つけふは元日

路ばたの石に木洩日落ちてをり歩みつつおも
 ふけふは元日
 路ばたの石に落ちたる木洩日の照り匂ひつつ
 けふは元日

七 草 粥

七草のなづなすすしろたたく音高く起れり七
 草けふは
 めでたさを祝ひてたける御國振七草粥をいた
 だきてたぶ

七草の粥は眞白し七草のななくさなづな青し
 七草

鮎つりの思ひ出

ふるさとの日向ひうがの山の荒溪の流清うして鮎多
 く棲すみき
 故郷の溪荒くして砂あらず岩を飛び飛び鮎は
 釣りにき
 われいまだ十歳とせならざりき山溪のたぎつ瀬に
 立ち鮎は釣りにき

おもほへば父も鮎をばよく釣りきわれも釣りにきその下つ瀬に
 上つ瀬と下つ瀬に居りてをりをりに呼び交し
 つつ父と釣りにき
 まろまろと頭禿げたれば鮎つりの父は手拭をかぶりて釣りき
 鮎つりの父が憇ふは長き瀬のなかばの岸の榎の蔭なりき
 釣り得たる鮎とりにかし笑ふ時し父がわらひは瀬に響きにき

囀をとりの鮎生きのよければよく釣れきをとりの鮎をいたはり圍ひき
 鮎かけのをとりの鮎をかこふべく石菖せきしょうの蔭にその箱かくしき
 夜半に来て憎き獺かほうそわがかこふ囀の鮎をよく盗みにき
 鮎盗むたびたびなれば獺の憎きを笄わなに落して取りにき
 冬ならば剥はぎて賣らむを獺のこの皮のつやよと言ひて惜みき

水打ちて躍れる鮎を手に持ち鼻に絲とほし
 罔とはしき
 鼻に絲さし罔の鮎となしゐつつ鮎の匂は掌てのひらに
 ありき
 水の匂苔の匂と云はむよはめぐしわが鮎高く
 にほひき
 幼き日釣りにし鮎のうつり香をいまたのひら
 に思ひ出でつも
 瀬の鮎の罔を追へるかすかなる手ごたへをい
 ま思ひ出でつも

瀬の水は練絹ねりきぬなしつ日に透きて輝ける瀬に鮎
 は遊びき
 瀬の渦にひとつ接むなり鮎の魚ふたつはすま
 ずそのひとつ瀬に
 淵の鮎は釣りにくかりき水澄みて影の見ゆる
 をくちをしみ見き
 淵の鮎は大きかりにき釣りがたみ諦めて見れ
 ば大きかりにき
 山の蔭日暮早かる谷の瀬に鮎子よく釣れ釣り
 飽かざりき

ひと日釣りし鮎の籠持ち歸り來れば背戸に蚊
 の多き夕闇なりき
 釣り暮し歸れば母に叱られき叱れる母に渡し
 き鮎を

竹の歌

植ゑて今年三年みとせとなりぬわが竹は瘦せ瘦せて
 立つ家のうしろに
 さき切りて植ゑたる竹の直なほき幹つや錆びはて
 て立ちならびたる

北向きのわが窓さきに竝びたちそよぐともせ
 ずこの瘦竹は
 幹瘦せて枝葉ともしきわが竹の孟宗まうそうに百舌鳥ももづ
 がよく來てとまる
 伸びたちて幹なほやかに枝葉深くこもらひ茂
 る竹をわが愛めづ
 日照れば濃き影落し雨降れば濡れてしだるる
 竹をわが愛づ

小鳥いろいろ

庭の木に啼けるひたきの美しくまひあそびつ
 つ聲さびて啼く
 聞きをりて笑みこそうかべみそさざいひたき
 も聲のみなあはれなる
 真冬啼くひたきみそさざいづれみな人里に
 なきて聲の錆びたる
 啼きすぎしは目白とおもふ冬いまだ深ければ
 聲のととのはなくに
 啼聲をひとつ落してゆきにけり地面チするばか
 りまひゆける鳥は

地におりてなける鳥あり曉の霜うす白き枝に
 啼けるあり
 庭くまを啼きうつりをるみそさざい聞きゐつ
 つおもふ庭の落葉を
 一群の目白うつり來てなきたちぬ庭の向ひの
 ひともと椿に
 わが家の離れてあれば雀居らず目白百舌鳥ヒ
 は寄りて遊べる
 鳥一羽芒かれ伏せる冬枯の原の枯木にをりて
 しき啼く

静けきに啼く鳥きこゆ啼く聲にこもれるいのち
 ちありがたきかな
 朝闇の残れるほどは川邊よりわが庭に来てあ
 そぶ水鳥
 水鳥のものをばかるふくみ聲あかつき闇の
 庭より聞ゆ

炭

火

熾^ちりたる炭火のさまをよしとおもふ猛く静け
 くてはかなきぞよき

燃えたたむ焔のきほひ内に見えて燃ゆとはし
 つつ燃えぬ炭の火
 燠^あの根にありとしもなきあはつけき青き焔の
 ありて動ける
 櫟の木檜の木の炭をよしとおもふ花咲けるご
 と燠の燃えたる
 山に生^おふる木々はうつくしみな親し焼きて作
 れるこの炭もまた
 朝づく日さし入れる爐に燠の火の錆びし焔を
 あげてをるかも

濱邊に住みて

珍しくけふ引網のかけ聲の背戸なる濱ゆ聞え
來るかも

引網のかけ聲きこゆ霜深き今朝を濱よりかけ
聲聞ゆ

静かなるこの曉を海人がどち聲うち合せ網引
く聞ゆ

海に落つる夕日のひかり照りたればこの長濱
の冬の寂びざま

この朝の浪のとどろき高かるよ障子うすあを
く明けむとしつつ

黒々と小舟群れをり冬風のかの沖あひのひと
つところに

立ち騒ぐ浪の音かも恙ありていねつつ聞けば
真近き濱に

わが庭に小石おほかり荒濱の浪のとどろき響
き來る庭

わが庭は芒の原に續きたり芒枯れ伏して色の
さやけさ

手^た繰^{くり}網^{あみ}引ける姿のあはれなりけふ冬風の濱の
 渚^{しほ}に
 椿^{つばき}の葉つやだち光る日和なりくるほしく起る
 鴨^{ひよどり}鳥^{どり}の聲

椿の花

創作社八幡支社諸君の歌を讀みて諸君に寄す。

彼の森に椿ひとと咲きたりと行き競ふらし
 若人たちは

わが背戸の森に椿は咲き出でて數かぎりなし
 見せたきものを
 眼あぐればすなはち見ゆるこの森の椿の花を
 見せたきものを
 葉漏日のかがよふ森の葉がくれに咲き枝^し垂^たれ
 たり椿の花は
 見に来よと言ひやりかねつけふもただ獨り見
 てをり椿の花を

述懐

事を好む心われにありけはしきに耐へつつを
 りてわれと苦しき
 たひらかにありがたき心われにあり苦しみあ
 へぐわれみづからに
 逢ひたしと思へる友をおもひつつをり寂しさ
 は身を浸したるかも
 身に近き友のたれかれを思ひみつ寂しからぬ
 なし人の生きざま

桃

畑

石あらしき桃のはたけをうちならす音の聞えて
 二月となりぬ
 さき揃へ刈りこまれたる桃畑の枝つやつやし
 蕾を持ちて
 桃ばたけ打ちならされて明るきに枝々の蕾咲
 き出でむとす
 桃畑の花のさかりぞあはれなる畑見廻りのた
 だに見まはり

溪
 間
 の
 春

富士と足柄とのあひだを流るる黄瀬川のみな
かみに遊びて。

通されし部屋に坐りて小暗きに障子はあけつ
篋たかむらの蔭

溪水に濁りぞ見ゆる山ざくら咲きなむとして
雨のしげきに

萌えたてるうすべにの葉のゆたかにて花いま
だしき山ざくら花

山櫻咲けりともなし明けがたのこのひととき
の空のあかりに

上ほ枝えなるは空にかがよひ下し枝えなる垂りて咲き
たる山櫻花

湛へたる淵のみぎはの岩の面もに苔まさをなる
春あけほの曙

曙のもののしめりの深ければ芽ぶける木々の
立ちて静けき

朝づく日峰にのぼりて山の蔭けぶらふ溪の山
ざくら花

此處ゆ見れば日は足柄あしがらの峰に出づ黄瀬せの溪間
の溪奥の宿

啼聲は水鳥なりきあけぼのの庭の木の間をな
きよざりたる

寒かりしひと夜の雨にみかさまし流るる溪の

山櫻花

よべ降りし雨に濁れる溪の瀬につるみて遊ぶ

川鳥鳥

楢の木の間まひあそぶ榎鳥のす
がたあらはなるかも

まふ時の羽根うつくしく榎鳥は遊びほけたり
芽ぶく木の間

榎鳥の群れて遊べる岡に見ゆ春しらたへの大
富士の山

あらはなる富士の高嶺のかなしけれ裾野の春
の野邊にあふげば

富士の嶺の裾野のなだれゆたかなる片野の春
の今はたけなは

木炭山すみとひとのたてたる雑木山木々はきほひ
て芽ぶきたるかも

むきむきに木々の茂りて静かなり椎は椎の木
榎は榎の木

ひともとの櫛の木たてり白櫛とおもふ若木の
 美しきかな
 葉ばかりに花のとほしき山櫻咲きまじりたり
 椎の木の間に
 なにならぬ花の匂ぞにほひたる雑木の山の春
 の日向ひなたに
 篋たかぎらの蔭をながるる溪淺し光りせせらぎ流れた
 るかも
 野のなかの溪は淺けれあさき瀬の水うちあげ
 て流れたるかも

浅川のせせらぎ澄みて流れたりうららけきか
 も鶯の聲
 この春にまだめづらしき河鹿なり此處の淺瀬
 にひそみ鳴くなる
 岩蔭の淵は静けし上つ瀬の水泡みなわは岩のかげに
 うかびて
 この溪の岩のかたちぞ面白き根をゆく水は瘦
 せて澄みつつ
 おのづから岩に苔むし松ま生おひぬ根をゆく水の
 流れやまなく

黄楊つげの木ぞ岩いわに生おひたる松まつの木ぞ榿けぞ生おひた
る寂さびびしこの岩
この溪たにの水みづの乏なしさ断崖きりぎしの岩いわに躑躅つとむの咲さきし
だれつつ

旅中即興の歌

下の囀せうの宿屋しゆくわにて。

藤ふじの若葉わかしほや船出ふねでの前の荷造にりのせはしき部屋へや
に見みたる若葉わかしほや

この國くにの山やま低ひうして四方よもの空そらはるかなりけり
鶴つるの啼なぐ

東萊温泉とうらいおんせんにて。

珍島ちんじま邑むら内うちなる創作せんさう社しゃ友福島ゆうふくじま勉つとむ君きみに誘いざなはれ同島どうじま
竹林しんりん洞どうに赴ゆく途中ちゆうちゆうの濱はまにて端はななくも鶴つるのまひ
遊あそべるを見み馬うま上のぼりながらに朗詠らうぎやうせる歌。

潮うしほ干かわ潟がたささらぐ波なみの遠とほければ鶴つるおほどかにま
ひ遊あそぶなり
遠とほ干かわ潟がたいまさす潮うしほとなりぬればあさりをやめ
て鶴つるはまふなる

うちわたす干瀉のくまの岩のうへに眞鶴たて
り波あがる岩に
おほどかに一羽の鶴はまひたてり三つ並びた
るなかの一羽は

竹林洞に同君の兄二郎氏の別墅あり、三日滞在す。

窓さきの若木櫻をかきたわめかささぎは二羽
とまりたるかも
わが連れし犬に戯るるかかささぎの聲はしどろ
に亂れたるなり

松葉焚く厨のけむり匂ふなりまだ灯ともさぬ
酒のむしろに
呼びかはす雉子の聲やをちこちは小松ばかり
の山まろうして
二聲をつづけて啼けば向ひなる山のきざすも
二聲を啼く

儒城温泉にて。

呼びさます鶺鴒の聲きこゆなり今朝も晴れたら
む窓さきの木に

京城慶福宮後苑内、緝敬堂にて。

ときめきし古しのぶこの國のふるきうつはの
くさぐさを見つ

金剛山内、長安寺にて。

咲き盛る芍薬の花はみながらに日に向ひ咲け
り花の明るさ
長安寺の庭の芍薬さかりなり立ちよればきこ
ゆ花の匂ひの

芍薬のなかば咲きたるまだ咲かぬとりどりの
花にあそぶ蟻蟲
美しき雀なるかな芍薬の眞盛りの園の砂にあ
そべる
長安寺梵王樓のたかどのに寝亂れたりな眞晝
を人は(寺内梵王樓所見)

同じく表訓寺にて。

表訓寺御堂の裏に廻りたればこは眞盛りの芍
薬の園

同じく正陽寺にて。

麓なる寺々の芍薬咲きたれど正陽寺の花はい
まだ蕾める

金剛山白雲臺より衆香城峰を仰ぐ。

まなかひに聳え鎮もりたふとけれをろがみ申
す衆香城峰
わが立てる峰も向ひの山々も並びきはひて天
かけるごとし

同じく萬瀑洞にて。

淵のかみ淵のしもにしたぎちたるたぎつ瀬の
なかの淵の静けさ
溪岸の森より出でて岩の上に遊べる栗鼠リスのあ
らはなるかも
栗鼠ふたつ溪あひの岩に遊べればかささぎも
来て戯れむとす
うち仰ぐ岩山の峰に朝日さし起りたるかも郭かくら
公こうの聲

金剛山の溪間に山木蓮なる花あり、寧ろ辛夷に似て更に眞白く更に豊かなる花なり。

たぎつ瀬にたぎち流るる水のたま珠より白き
山木蓮の花

この淵の静けきにももの浮びたれ枝のままなる
山木蓮の花

京城にて妓生の舞を見る、中に四鼓の舞といへるあり。

長き袖うちふりあげて打ち鳴らす鼓のひびき
いよよ迫り來

元山港にて。

眞向ひの沖に昇る日うららけく照らしたるかも
此處の港を

偶然小學時代の舊友に會ひて。

ひとの世は永し短したまたまに相會ひて語る
これのたのしさ
この國に珍しき竹の林見ゆ訪ひ來て君が窓ゆ
望めば

歸途船中にて。

勞^{つか}れたりいねむとおもへ切り進む舳^{へさき}の浪をき
けばねがたき

歸途病みて別府温泉に滞在す。

わが家^やにも早やうれたらむ吾^お子^こたちも今はた
べるむこの桃の實を
留守居する子等うちつどひたうべるむその桃
の實を父もたぶるよ

はつふゆ

松が枝^えに鴉とまりつおもおもと枝のさき揺れ
て枯葉散りたり

わが家を圍みて立てる老松よ高く眞黒く眞直
ぐなる松よ

ほがらかに鶉啼^{ひよ}く聞ゆ老松の梢^{うね}の高みに鶉啼
く聞ゆ

この頃の部屋の障子にさす日影親しいかなや
冬に入りたる

灰をならし心しみじみなりにけり夜半の圍爐
 裡に獨り向ひる
 朝宵に圍爐裡にかざすもろ手なり瘦せたるか
 なや老のごとくに
 池尻の落葉だまりに水あびてあらはなるかも
 一羽の小鳥
 池尻の砂を流るる水清し蜺の貝を其處に飼ひ
 なむ
 植ゑよとて柿の木の苗を貰ひたり植ゑて四五
 年たればならむとふ

この朝よ木枯吹かむけしきなりひむがしの空
 に雲低く散り
 枯れし葉のまひおつるごとかろやかに枝を離
 れし何の小鳥ぞ

枯野

水底に魚ぞ泳げるありとしもわかぬかすけき
 影ひきながら
 枯葉いま落つるさかりの桑畑の廣きに居りて
 人の耕す

百廿七
 NO
 七

道ばたの井手の流のうちあぐる水音聞ゆ冬野
 ゆくわれに
 路ばたにながるる井手の水澄みて枯草の蔭を
 流れたるかも
 近からばつみて歸らむこの井手に冬うつくし
 う芹ぞ生おひたる
 榛はの木の株のひこばえ落葉して枝繁けれや何
 鳥か居る
 返り咲ける木瓜はのくれなる枯草の根がたの土
 につきて咲きたる

畦草あきや冬田のなかの路一里来ていこふなりこ
 の畦草に
 枯草の伏しみだれたる野の此處に野路のはかす
 かに分れたるかも

森のひなた

かき坐り膝のめぐりの落葉の色めでつつあれ
 ば日のさしてきぬ
 冬枯れし枝のあひ漏れてさしてをるこの日の
 色のあたたかきかな

斯くしつ々時はもたつかわが坐るめぐりの落
 葉に匂ふ日の色
 犬柘植いぬつげの若木の枝葉しげかるに散りつもりた
 る栗櫟くわきの葉
 この松に松かさ茂ししげくしてみなちひさき
 が葉がくれに見ゆ
 うづだかき落葉のうへに置きてみればわが辨
 當のさいの美し
 据ゑおけばガラスの壺の酒のいろ其處の落葉
 のいろよりも濃き

手にもてるガラスのコブの酒にさすこの木洩
 日は冬の木洩日

裾野にて

夜には降り晝に晴れつつ富士が嶺の高嶺の深み
 雪ゆきかがやけるかも
 冬の日の風めづらしみすがれ野のにうち出でて
 来てあふぐ富士が嶺
 富士が嶺の麓にかけて白雲のゐぬ日ぞけふの
 峰のさやけさ

天地のころあらはにあらはれて輝けるかも
富士の高嶺は

老松

朝づく日させる仰ぎつ夕づく日させる仰ぎつ
此處なる松を
海の風荒きに耐へて老松の梢の寂びたる見れ
ばかなしも
枝葉こそさわぐと見つれ老松の幹もかすかに
風に揺れをる

ゆらぎあひて天にそびゆる老松は老松どちに
枝かはしたり
うち仰ぎ眺めつつわれのあるからに老松が梢
はゆれてやまなく
われはもよ幼子のごとあふぐなりこの老松の
根にし立ちつつ
うら寒く夕日さしたる老松の梢に風のやどり
たるかも

古今
NO
¥

池の鮒 (以下昭和三年)

親魚は親魚ばかり墨の色のちさき子鮒は子鮒
 ども遊ぶ
 一疋がさきだちぬれば一列につづきて遊ぶ鮒
 の子の群
 鯉の魚はおほまかにして鮒の魚ははしこかり
 けりとりどりに居る
 青笹を入れやりたれば池の鮒早や青き葉の蔭
 に來てをる

動かねばおのづからなる濃き影の落ちてをる
 なり池の鮒の影
 餌をやれば親鮒は逃げ子鮒どもわが手の下に
 群りてをる
 静やかに動かす^{ひん}鰭の動きにも光うごけり眞晝
 日の池に
 群りて逃げて行きしが群りてとどまれる見れ
 ば鮒の静けさ
 入れてやりし青笹の影深かるに鮒の影ありて
 動くかすかに

雑

詠

降り出でし時雨は強し窓さきの枯枝にゐて啼
 くひたき鶏かも
 ありがたき夕暮ごとの一風呂やぬる湯このみ
 て長湯するなり
 さし出でて池の上に咲く躑躅の花水にうつり
 て深きくれなる
 障子ごしに聞きをれば其處の木に居りて啼く
 頬白のうつなげの聲

縁さきになり枝垂れたる茱萸の實の熟れ赤ら
 みて枝折れむとす
 やうやくに竹の形をなしきたり若竹どちのう
 ちそよくなる
 庭の池の溢れつつありて静かなり部屋には蠅
 の三つ二つとび
 かすかにかすかに流るる水の音きこゆ眞日さ
 し照れる庭草の蔭に
 池に落つる水はひねもす音たてて寂しきわが
 家を輝かすなる

音もせぬ水の流のかぼそきが光りて庭を流れ
 たるかも
 若葉さしうすむらさきに咲きいでし樽の花の
 かげにゐる百舌鳥
 匂ひ来る匂ひに驚き出でて見れば山梔子の花
 咲き出でにけり

『春花譜』と題せし中より。

わが庭の池のはたなる梅の木のもと並びて
 咲きいでにけり

老木より若木の梅はいち早く咲き出づるかも
 春ごとに見れば
 わが友のもて来て植ゑし沈丁花はや庭すみに
 咲き出でてをる
 わが庭に移し植ゑたる深山木の山櫻咲きぬ花
 のちひささ

この頃取り出でて用ゐたる。

青柳に蝙蝠あそぶ繪模様の藍深きかもこの盃
 に

中村終花に寄す。

君が庭に見てきし花の草藤の咲き出づる見れば君をしぞ思ふ

合 掌

妻が眼を盗みて飲める酒なれば惶^{おわ}て飲み噎^ひせ鼻ゆこぼしつ
うらかなしはしためにさへ氣をおきて盗み飲む酒とわがなりにけり

足音を忍ばせて行けば臺所にわが酒の壺は立ちて待ちをる

麥 の 秋

麥の穂の風にゆれたつ音きこゆ雀つばくら啼きしきるなかに
うちわたすこの麥畑のゆたかなるさまをし見れば夏^た開けにけり
熟^う麥のうれとほりたる色深し葉さへ莖さへうち染まりつつ

呂竹電 NO 卅

うれ麥の穂にすれすれにつばくらめまひ群れ
 て空に揚雲雀なく
 立ち寄れば麥刈にけふ出で行きて留守てふ友
 が門の柿の花
 刈麥を積み溢らせて荷車のひとつ行くなりこ
 の野のみちを
 眞晝間はたまになく河鹿の聲起りたるか
 も川瀬のなかに
 岩かげの水に浮き出でし川鴉鋭き聲をあげに
 けるかも

川鴉なきすぎゆきぬたぎつ瀬のたぎち輝き流
 るるうへを
 藤蔓の葉の茂みよりこぼれ落ちし川蟬の鳥は
 水にむぐりぬ

水 無 月

すすめ子のおりゐて遊ぶ縁先の庭のしめりの
 なつかしきかな
 雨蛙なきいでにけりとりどりの木々の若葉の
 ゆれあへる中に

いつせいにさやぎたちたるならの木の若葉の
 さやぎさやかなるかも
 軒端のきばなる藤の若葉の明るきにさしとほりたる
 水無月みづつきの日よ
 藤の葉も若竹叢も庭木々もうちそよぎやまぬ
 眞晝時なり
 をりをりに縁に散り込むうす黄なる竹の葉あ
 りて水無月の風
 軒端なる若竹叢にあふぎたり思ひがけざりし
 こよひの月を

曇を憎む

つばくらめ飛びかひ啼けりこの朝の狂ほしき
 ばかり重き曇に
 窓あけてなほ耐へがたき深曇くもれる空に燕
 啼くなり
 降るべくは降れ照るべくは照りいでよ今日の
 曇はわれを狂はしむ
 けふ幾度いくたび顔を洗ひけむ晴れやらぬ心晴れよと
 願ふおもひに

寄りあひて卵をこれにひれよとて青笹やりぬ
 池の鮒の群に
 親竹は伏し枝垂れつつ若竹は眞直ぐに立ちて
 雨に打たるる
 降り入れる雨に葉末をことごとくふるはせて
 をり若竹むらは
 筍の落せる皮を拾ひ持ちてこの美しきにここ
 ろうたれつ
 腹かへす魚の影見ゆ雨を強みさざなみだてる
 池のそこひに

障子ごしに聞き入ればいよよ音たてて軒端の
 竹に雨の降るなる
 眞盛りを過ぐれば花のいたましくダリヤをぞ
 切るこの大輪を
 梅雨空の曇深きにくきやかに黒み静まり老松
 は立つ
 ゆれたてば音こそ起れ青嵐吹き渡る軒の若竹
 むらに
 紫陽花の花をぞおもふ藍ふくむ濃きむらさき
 の花のこひしさ

酒ほしさまぎらはすとて庭に出でつ庭草をぬ
くこの庭草を
芹の葉の茂みがうへに登りゐてこれの小蟹は
ものたべてをり

奉 祝

秩父宮殿下の御成婚を祝ひまつりて。

わがせなと申しまつらむ親しかる皇子みこはよび
ます美しの姫を
おふたかた並びたまはばいかばかり美しから
むかしこみおもふ

最後の歌

卷末記

○本卷には、大正十年三月發行の「くろ土」大正十二年五月發行の「山櫻の歌」及び、未刊の「黒松」歌全部を収めた。前二著の歌のなかには其後改作されたものが相當にあるが、それらはすべて改作に従つた。故に本卷所載のものを正しと見ていただきたい。

○「くろ土」の歌数は序文の中に一千首とあるが、これは計算の誤で、一首少く九百九十九首が正しい。「山櫻の歌」は七百四十一首あつたが、一首は「くろ土」所載のものと重複してゐたのでこれを削り、七百四十首となつた。「黒松」は正確に一千首である。

○「黒松」は生前に上梓の意志があり書名まで確定してゐながら身邊の匆忙と健康の思はしからざりしとにより、その意を果し得なかつたものである。編輯には殆んど手をつけてなかつたので、これは「くろ土」「山櫻の歌」に倣つて編輯した。歌数が偶然にも一千首になつたのはちよつと不思議な氣がする。「土肥温泉雜詠」「峽のうす雲」等の如き題は大部分嘗て新聞雜誌に發表されたときのものをそのまま用ゐたが、中には題を缺いてゐたので編輯者のつけたものが若干ある。「旅中即興」または「旅中即興の歌」といふのが數ヶ所にあるが、これらは發表當時のままにして、變更することをしなかつた。多忙なる揮毫旅行中の作で、字義通り即興の作である。この中には

旅中携帯の手帳の中から編輯者の拾ひ出したものが若干ある。なほ大正十二年以降に諸新聞雑誌に發表された歌で採録しなかつたのが多少あるが、これは種々な點で不滿があり先生自身抹消の印をつけてあつたので、その意志を尊重することにしたのである。「最後の歌」二首は未發表のもの、而して「芹の葉の」の歌は七月廿九日作と歌稿に明記されてゐるが、「酒ほしさ」の方は不明である。これは歿後その机上に載せられてゐた雑誌「創作」の裏に赤インキで書かれてあつたのが發見されたので、選歌のつれづれにでも書きつけたものであつたらう。「創作」は六月號だけれど、歿後まで机上にあつたところからみれば、或はこの歌が最後の作であつたのかも知れない。

○口繪寫眞のうち最初の肖像は「山櫻の歌」の口繪と同一のものであつて、これについては同書の序文の中に詳記されてゐる。書齋は沼津市千本松原の蔭の家、手前の茂みは茶菓山吹其他でその向うに見えて軒に届いてゐるのは布袋竹、これらは生前非常に愛して居られたもので「黒松」の中にも屢々歌はれて居る。千本松原もその熱愛してゐたもので寫眞は俗稱「御首塚」の附近、松原中でも松の最も美しいところである。歌稿は「黒松」所載の一部、なるべくその氣分を出すために、欄外に書かれたものもそのままにしておいた。(大悟法利雄記)

(兩角製本)

昭和四年八月一日印刷
昭和四年八月三日發行



牧水全集 第三卷

著者 若山 牧水
 發行者 山本 三生
 印刷者 竹内 喜太郎
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
東京市牛込區榎町七番地

發兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目六番地

改

振替口座東京八四〇二
電話芝(43) 四三二一
番番番番番番社

竹電
NO
¥

百竹

NO

¥

南屋松坂屋古呂
竹中書店
電話中一三三〇

NO

¥

70

[Faint handwritten text and sketches on lined paper, including a large curved line and some illegible characters.]

